

『礼に始まり礼に終わる』



開催につき賛否両論のあったオリンピックも開幕から1週間以上が経過しました。

コロナ感染拡大に伴いまたも緊急事態宣言、蔓延防止等重点措置が発せられるという状況の中、明るい話題は日本選手のメダルラッシュであると思います。

特に柔道は男女併せて過去最高の9個の金メダルを獲得しました。阿部兄妹の史上初の同日金メダル獲得、リオデジャネイロ大会銅メダルで悔し涙を流した永瀬貴規選手の大げがからの復活優勝など印象に残る場面が多くありました。

この活躍の背景には、コロナ禍で各国の選手団が十分な準備ができなかったこともあるかと思いますが、その点に関しては日本も同じです。

先日、ある報道番組で特集されていましたが、全日本柔道連盟は科学研究部を作り、科学的トレーニングを積極的に取り入れました。また他国選手あるいは審判についてまでも科学的に分析するなど他国に勝る強化対策がとられた成果もあるようです。しかしやはり井上康生監督を中心とするコーチ陣と選手個々との信頼関係が今回の素晴らしい成果の大きな要因であったようです。

因みに井上体制初めてのオリンピックである前回のリオデジャネイロ大会では、男子は全階級のメダル獲得(金メダルは2個)を達成しました。残念ながら名将井上監督は今回のオリンピックで勇退されるとのこと、今後のチームがどう変わっていくのか興味深く見ていきたいと思います。

今回の柔道チームは、その素晴らしい成績以上に賞賛されたのは、選手が礼節を重んじ対戦相手に対するリスペクトを忘れないという態度でありました。代表的な存在として男子73kg級の^{大野}将平選手があげられます。彼の試合前後の立ち居振る舞いはまさに柔道精神そのものであると思います。

大野選手の礼の美しさは中学校の道徳の教科書に取り上げられたほどです。

今回はオリンピック2連覇という偉業を達成しましたが、試合後のコメントも素晴らしいものでした。

ご存じの方もありますが、コメントの一部を抜粋します。

「(東京五輪開催への)賛否両論があることは理解しています。

ですが、われわれアスリートの姿を見て、何か心が動く瞬間があれば本当に光栄に思います」。

今回の日本チームは大野選手の影響もあり他の選手達の態度もこれまでとは少し異なっていたように思います。

たとえば試合勝利後のガッツポーズはその一例かと思います。それが必ずしも悪いことではないでしょうが、やはり日本選手は武道の精神である「礼に始まり礼に終わる」を体現することが、海外からも尊敬される日本柔道のあるべき姿ではないかと、今大会を通して改めて思いました。

今後、日本柔道は各国からさらに研究され、国際大会で勝つことが一層難しくなっていくことと思いますが、この礼節を重んじる態度はいかなる状況においても貫いてほしいと切望しています。

